

校長室の窓から



思い出の先生② ～ O 博士 ～

O(「オー」です。「ゼロ」ではありません。)博士は母校天理大学の恩師。当時は助教授。新進気鋭の学者で、専門は近・現代の短歌。学生と十五・六歳しか離れていない上に見た目が若かったので、「先生」というより、兄のような存在として慕われていました。飲み食いを共にするのは日常茶飯事で、ソフトボールをしたり、先生の学会出席についていたりしていました。

O 先生から最初にかけての言葉は、授業中、「君は鴟外の『舞姫』を読んだことがあるかね。」でした。

「いえ、読んだことはありません。」と答えると、

「もう、帰ってよろしい。」と先生。

当時、私の大学は指導が厳しいことで知られていましたので、『これはえらいことになった。』とうろたえていると、後ろの同級生が私の背中を突つきながら「関西のギャグ」と教えてくれ、本当にホッとしました。

そんな悪趣味ともいえる悪戯っ気がある O 先生ですが、相撲が大好きで、よく学生相手に相撲を取り、「本気やで。本気やで。」と言いながら、片っ端から投げ飛ばしていました。私も一度だけ指名されて、先生と組んだことがあります。

同級生や先輩が、みな投げ飛ばされていたので、さぞかし強いのだろうと思い、『どうせ負けるし……』と嫌々ながら立ち会って組んでみると……

『え？ 弱い？……もしかして、みんな、忬度？』

などと考えているうちに先生が腰砕けに自滅してしまわれました。

以来、一度もご指名はありません。

さらにひどいことに、私は『O 先生を投げ飛ばした奴』として、諸先輩から厳しいまなざしを向けられることに。

「投げ飛ばしたんじゃなくて、引き付けたら勝手に潰れた。」と同級生に弁解すると、

「そんなん、余計あかん。」とのこと。

何が「あかん」のか、さっぱりわからないまま、私は『O 先生を投げ飛ばした奴』の汚名を甘んじて着ようと覚悟を決めました。しかし、この開き直りが幸いしたのか、島根県出身の無名の新人が「いじりネタ」として面白がられ、結局先輩にかわいがられるようになりました。

ところで本題。O 先生の授業は、とても丁寧で分かりやすかった。そして、何より驚いたのが、学生の良さを引き出すうまさ。学生の着眼の一つ一つに「意味」を与え、自分の「価値」に気づかせる。学生の着眼が単なる思い付きだったとしても、また、ただの偶然だったとしても、O 先

生はその一つ一つを実に丁寧に扱い、学生一人一人の中からキラリと光るものを掘り出してくださいました。そして、みんな「その気」になって自分の宝石を磨いていった。

もともと古典が好きだった私は、近代・現代がご専門の O 先生の下で研究しようとは、全く考えていませんでした。しかし、O 先生の授業と人柄にどんどん惹きつけられ、とうとう『専門は何でもいい。この先生についていこう。』と思うようになりました。

ところが、そもそも私は高校では理数コース。本当に、何かの間違いで文学部に籍を置くことになってしまったわけで、物理や数学の合理性に「美」を感じる感性から見ると、最も苦手なのが詩・短歌・俳句。

『我泣きぬれて蟹とたわむる』……蟹は食え! とか、『クラムボンに笑ったよ。』……幻覚? といったセンスのなさ。

そんな私が「近・現代の韻文(詩・短歌・俳句など)を専攻する」と言い出したものですから皆仰天。特に姉は「絶対無理だから、今からでも改心しなさい。」と、再三説得してくれました。

実際、大学 1 年当初は、同級生から『無機質系』とあだ名された国文学部の異端児。そんな異端児でも O 先生は決して見捨てられなかった。まさに「無機質」にもわかる言葉で、丁寧に導いてくださいました。

それから 1 年後、私は「詩の会」というサークルに入会し、創作活動を始め、翌年その代表に。そして卒業まで同人誌「ル・セル」の編集長を任せられました。

卒業から 10 年後、大学院で研究をしていた私のために、O 先生は同僚と教え子を集めて、成果発表の場を作ってくださいました。そして 20 年後、母校の大学で 5 年間、「国語科指導法」の教鞭をとる機会をいただきました。

O 先生は、台湾大学の教授を最後にご退官。ご夫婦で台湾から奈良市に帰ってこられました。お迎えした折、「また、相撲取りますか?」と言うと、「君とは取らん。」と言って、奥様と大笑いされました。